The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み 「べてるの家」訪問研修報告〉 ケアを学習する会 : 精神障害のある方を地域で支えるTEAM ぴあ[浜松] の試み
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	臨床哲学. 2015, 16, p. 185-186
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51592
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ケアを学習する会
―精神障害のある方を地域で支えるTEAMぴあ[浜松]の試み

日時：2014年8月9日（土）
場所：大阪大学中之島センター

浜渦（司会）

本日は、台風の近づいているなか、お集まりくださり、ありがとうございます。私のほうから、本日の「ケアを学習する会」の主旨を簡単に説明させていただきます。

先日（7月2日）の新聞で、厚生労働省の有識者検討会が、精神科病院の病床を減らして居住施設に転換する政策案について、条件付きで認めることを決めたことが報道されました。それは、病院敷地内にグループホームをつくれるようにするもので、ただし強い反対意見が出たことを踏まえ、対象を現在の入院患者に限定し、まず試行的に実施して運用状況を確認するとしたものです。この件については、先日、朝日新聞で社説「精神医療改革　あくまでも地域へ」(7月22日)が掲載され、NHKテレビ「クローズアップ現代」で、「精神科病床が住居に？ 長期入院は減らせるか」（7月24日）が放映されました。振り返ると、厚生労働省はすでに「精神保健医療福祉の改革ビジョン」（2004年）および「精神保健医療福祉の更なる改革に向けて」（2009年）によって、長年にわたって「社会的入院」を続けて来た精神障害者の「入院医療中心から地域生活中心へ」という基本的な方策を発表し推進してきましたが、それがなかなか進まないということで、上記のような苦肉の策となった次第です。しかし、問題は、社会的入院の患者達をとにかく退院させるということよりも先に、彼らが地域生活を始められるような環境作りの方が先決のはずなのに、それを怠って来たことにあると思われます。

そこで、本日は、精神障害のある方を地域で支える活動（ACTと呼ばれています）を地道に続けて来ているTEAMぴあ（浜松）の試みについて紹介いただき、皆さんと一緒に考えたいと思います。本日の会を準備して来た大阪大学のメンバーでは、石川 信義『心病める人たち―開かれた精神医療へ』（岩波新書、1990年）、大熊一夫『精神病院を捨てたイタリア　捨てない日本』（岩波書店、2010年）、伊藤順一郎『精神科病院を出て、町へ― ACTでつくる地域精神医療』（岩波ブックレット、2012年）、近田真美子「〈関係性〉をつくる　重度の精神障がい者の地域生活を支える看護実践から」（『現代思想』2013年

8 月号）などの参考文献 (その後、『精神看護』2015 年 1 月号では、「あっと驚く ACT です「暮らしを支える」ってこういうことだったのね」という特集が組まれ、近田真美子氏が ACT の看護師にインタビューを行い、彼らの語りを丁寧に記述する現象学的手法により、ACT の現場の多様な事象をあぶりだした論考が掲載されている) も一緒に読んで来ており、本日の現場からの話を大変楽しみにしています。それでは、上久保さんからよろしくお願いいたします。